

豆狸の寝言

副会長 三原幸二

東京出張からの帰り、難波駅から乗った電車でこんなことがあった。

どこかに座れる場所はないかと、荷物を持って空席を探していたが、あいにく満席だった。

せめて荷物だけでも置こうと思い、網棚に置いた。女性四人に男性一人、計五人である。その五人が、私が網棚に荷物を置いた瞬間、いっせいに動いた。

座席を見ると、二人ぐらい座れる空間ができています。ついさっきまで、一人が座る余地もなかったのに。

私は軽く会釈して、その空席に座らせてもらったが、席を空けてくださった五人の方の気づかい以上に、五人がいっせいに同じ行動をとった、ということに感心していた。

目をつぶって会話を聞いていると、その方たちは、何かの趣味のお仲間のような様子である。日ごろから意思の疎通が図れているからこそ、以心伝心の動きができたのだろうと納得した。

電車に揺られながら、私は会社の「意思の疎通」に思いをはせた。

会社には、営業、仕入れ、会計、総務、いろんな部署がある。普段から他の部署と接する部署もあれば、ほとんど接しない部署もある。会計と営業は前者であり、総務と営業は後者といえるだろう。

しかし、どの部署の社員も、同じ会社で働いている同士である。普段からあまり接しない部署であろうと、何かの折に話ぐらいしたことがあるだろう。そのわずかの機会に、同じ会社の一員として、互いの仕事や人柄に関心を持つとうという気持ちがあれば、その積み重ねが互いの理解につながっていき、



何かの時には心を一つにしていっせいに動く、というようなことができるようになるかもしれない。

日本の社会では、情報の共有化とか、一元化ということが言われて久しい。「部門間のカベを取り除かなければ、経営の効率化、スピード化は図れない」、「各部署の目的は、会社の目的と同じでなくてはならない」ということもよく言われる。

よく言われるということは、あまりできていないということである。「意思の疎通」は、大企業、中堅、小企業に関わらず、共通の課題のようである。「意思の疎通」に秘訣があるとすれば、電車で出会った趣味のお仲間のように、「気心の知れた間柄になる」ということかもしれない。

(2004年・心を合わせるということ)